

2020年最初で最後のコンサート

2020.12.27

そもそも獣たちのように牙や角、爪などの武器を持たない人間はとにかく肩を寄せ合って危機が去るのを待ち、知恵を出しあって立ち向かってきた。そして、喜びも悲しみも肩を抱き合ってそれを分かち合ってきたのだ。そう！人は人と集い、つながって、育ち、生きているのだ。

2020年の1月、2月の日記（らしきもの）を読み返してみた。新型コロナウイルスについての表記はなんと2月の中旬になってやっと出てくる。だれがこんな世の中になってしまうと予想できただろう。そして、3月初旬の突然の全国一斉学校休校、第一波の感染流行、緊急事態宣言と世の中が進んでいった。

緊急事態宣言のなかでも早朝に電車に乗る毎日が続いた。電車に乗る人が一人二人と減っていった。感染防止のためにまだ春先の寒いなかでも窓を少し開けて電車は走る。自分以外のだれもない車両に「感染拡大防止のために時差出勤、テレワークをお願いします」との車掌のアナウンスが響く。「私たちは、私はどう生きていけばよいのだろう」「私たちの歌はどうなるのか」「コロナ禍は私たちに何を教えているのか」と自問自答する日々が続いた。

感染症の感染を防ぐには、「不要不急の外出は避け、3密を避ける」しかし、3密を避け、不要不急の外出を避けてじっとしていればいいのか。人が人らしく生きるとはどういうことなのか。あたりまえに集い、歌っていたことのがたさ、幸せを実感した。やがて感染症にかからない、人にうつさないことと人が人らしく生きることの両立、共存の模索がはじまった。

練習会場や演奏会会場、活動をおこなっていくためのガイドラインが出始め、まだまだ得体の知れないコロナウィルスとの闘い、いや、共存のための取組が各地でおこなわれていることはご承知の通りである。E. Clair, Kyotoもよく話し合い、ガイドラインを遵守した上で、活動再開にこぎ着けた。やはり歌はわたしたちのそばにあり、集い、響きあってClairの歌となるのだ。歌はわたしたちの生きる理由でもあるのだ。予定されていたいくつかのコンサート、ステージ、コンクールの舞台はすべて中止となった。それならばさらにアンサンブル力を高め、実力をアップしようと思ったのがルネサンスポリフォニー音楽の数々である。ルネサンスポリフォニー音楽の宇宙的な響きにハマりつつも、普段でき

ない曲をと選んだのが「みやこわすれ」をはじめとする歌の数々だ。「いつか肩肘を張らず、そう多くない数のお客様にゆったりとした気持ちで聴いてもらえるホームコンサートのようなものもやってみたいねえ そんなClairもいいかも」と話していた夢が実現する。こんな曲をClairとやってみたいと温めていた曲の数々だ。

実は2020年はE. Clair, Kyotoにとっては結成10周年のメモリアルな年であった。5月にびわ湖ホールでオール近代フランスプログラムコンサート、7月には宝塚国際室内合唱コンクールへの出場、念願の予選突破だった。11月には客演に本山秀毅さんをお迎えしての京都コンサートホールアンサンブルムラタでの10周年記念コンサートのはずだった。ついでに他の団と予定されていたボクの数多くのコンサートもすべてキャンセルとなった。あたりまえに振っていたコンサートはどんな感覚だったのか思い出そうとしている自分がいる。

結成5周年のコンサートの後はじまったE. Clair, Kyotoとの付き合いは5年の歳月が過ぎた。5年という与えられた任期がこれで終了となる。与えられた期間で最大限の成果を上げる。あたりまえのことだが、これがそう簡単ではない。こんな言葉がある。

一年を思うものは花を育てよ。

十年を思うものは木を育てよ。

百年を思うものは人を育てよ。

よく教育は農業になぞられて語られることが多いが、一番大切なのは「耕す」こと。耕すはcultivateであり、culture（文化）と語源を同じとする。この「耕す」という営みなしに、人も文化も育ててなんかいかないのだ。ひたすらに耕し続けることだ。

「生きるものはみな、不可視の高さからく生きよ」と命じられたものを生きている。あるいはその声に深く託されたものは何かをくり返し問いなおし、しかもそれへの果てしない応答の如くにも生きている。どの生もみな、それぞれの内なる遠さへの限りない問いであり、応答である。」と「飛翔—白鷺」「くちなし」の詩人であり、数学者でもある高野喜久雄は述べる。

わたしたちもこのコロナ禍で少なからず生きる意味、歌う意味を自らに問いかけて歌ってきた。そして、つながり、響きあって歌ってきたのが、この歌の数々である。